「へ」と「に」の消長

青木伶子

一　まへがき
二　平安時代中期以前
(一)　「へ」助詞の用法
(二)　「に」助詞の用法
(三)　「へ」助詞の特性
(イ)　万葉集
(ロ)　竹取・伊勢・土佐・大和
(ハ)　源氏物語
三　院政時代以後
(イ)　今昔物語集
(ロ)　宇治拾遺物語
(ハ)　古今著聞集
(ニ)　天草本平家物語
四　結び

一　まへがき

「へ」助詞は

人のむすめをぬすみてむさしのへゐてゆくほとに(伊勢一二)

内裏へなん参る(大和六五)

の如く、移動々作の目標を示すのに用ひられる。が、かゝる用法は「に」助詞にもある。

昔おとこ伊勢のくににゐていきてあらむといひけれは(伊勢七五)

内裏に参りたりけり(大和一〇二)

勿論格助詞「に」には

(一)場所や時間を示す用法

岳に菜つむ

神無月に薬師仏供養し奉る

(二)作用の結果を示す用法

内大臣になる

(三)比較の標準を示す用法

うぐひすにおとる

㈣動作の目的を示す用法

御迎へに参る

㈤受身動作の出自、使役動作の目標を示す用法

母に嘖らる

人に琴とらす

㈥用言を重ねて意味を強める場合にこれを結ぶ用法

狂ひに狂ひ念ふ

等、非常に多くの用法があり、先の如き用法はこれらの中の一であるに過ぎないけれども、一見、全く差異なく用ひられてゐるかのやうである。しかし最初から全く同じ職能を果す為に二つの助詞が共存する筈はないし、歴史的にみても「へ」助詞は非常な変化を遂けてゐるから、両助詞の関係も常に一定ではない。

一般に両助詞の差異は〃場所〃と〃方向〃であるとされてゐる。日本文法学概論にも

文語に於て「へ」は動作の進行する目標所在の方向を示すものであり、この働きは「ニ」にも存するので混同され易い。が「ニ」は動作の帰着すべき地位を示すのに対して「へ」はその動作者がその地点まで実地に行きつくか否かは度外に置いたものである。故に「へ」は地位としてはその指す所が漠としてゐる。

旨述べられ、

西へ行く　筑紫へつかはす

住む館より出でて船に乗るべき処へ渡る

の例を挙げて居られる。これらの例、及び奈良時代の万葉集に於ける用例のみを見る時は、「へ」助詞の承ける語が

国紀　倭　安太　猿帆之内　美夜古　阿米　韓国　都久之

夜麻登　宮　奥　桜田　里　新羅　吉野

等であって、すべて漠然とした場所を指してゐるから、この説明を以ても納得し得るのであるが、平安時代には

山（不二山）……竹取物語

友だちの許……大和物語

六条の院　殿（二条院）　対　寝殿　寺　常陸殿　伊勢の宮

……源氏物語

等、限定された狭い場所を示すものが数多く現れるし、一方の「に」助詞にも

あにおとゝ友たちひきゐてなにはの方にいきけり（伊勢六六）

しらぬところにゐてわたし給はん（源氏・夕霧一三七二14）

の如く漠然たる場所を示すものが存する。故に、指す所が漠としてゐるか否かのみを以て両助詞の差異を規定することは無理なのではないかと考へる。

石垣謙二氏は「助詞『へ』の通時的考察」（助詞の歴史的研究、及び文学十一巻六号所収）に於て大要次の如く述べて居られる。

「へ」助詞は上代に於ては単なる方向性のみを示すものではなく、甲地点を出発して乙地点へ進み近づく意を荷ふもの、即ち動作の経由を表してゐる。これは奈良時代平安時代を通じて妥当するが、後次第にその経由性を捨象し単純な方向性へ変化してゆく。即ち、源氏物語の

かしこく思ひ企てられけれど専ら本意なしとて外様へ思ひなり給ひぬべかなれば（東屋）

に於ける「思ひなる」の如く、具体的経由性ならぬ心理的経

由性を有する例に端を発し、今昔物語集に於ける

息ト思シキ方ヘ只這ニ這ヒケルニ（巻十六・三五六）

の「這ふ」の如き、先天的に語として経由性を内在せず之等動作の結果として経由的動作を伴ふものへと発展し、更には宇治拾遺物語の

このよし院へ申てこそはといひければ（巻十二・二三〇）

この児をいだきて日本へむきて（巻十四・二五九）

の「申す」「向く」等、全く経由性なく純粋の方向性のみを表す例へと益々発展する。

これは「へ」助詞の変遷を明かに跡づけたものであり、従来「へ」助詞の承ける語のみが注目されてゐたのに対し、かゝりゆく動詞に制約のある事を発見された点に優れた特色が認められる。が、石垣氏は専ら「へ」助詞についてのみ考察された為、同様に用ひられる「に」助詞との差異や関係は明らかにされなかった。この点が明かにされなければ「へ」助詞の性格も完全に知り得たとは言へないやうに思ふ。故に私は常に「に」助詞との関係に留意しつゝ以下考察を進めたい。

二　平安時代中期以前

㈠　「へ」助詞の用法

懸りゆく動詞

「へ」助詞の懸ってゆく、移動性を有する動詞について「に」助詞と対比しつゝ見ると、次の事実に気付く。

㈠移動々作の行はれた結果ある場所に達する、の意を表す動詞「ック（着）」「イタル（到）」には決して「へ」助詞を用ひない。（註1）

㈡実際に移動し進行する意を表す動詞の中、移動しつゝ言語主体の方に進み近づく意を表すもの（この意を最も端的に示す動詞は「ク（来）」であり「マキル・ワタル・オハス・オハシマス・モノス・マカル」等もこの意を担ふ場合がある）にも「へ」助詞は用ひない。（註2）

㈢移動しつゝ言語主体の現在地点から離れ遠ざかる意を表す動詞（最も代表的なのは「ユク（行）」でありその他「マキル・ワタル・オハス・オハシマス・モノス・マカル」等）に限って「へ」助詞が用ひられる。

承ける語

「へ」助詞の承ける語についてみると、先に述べたやうに、指す所が漠としてゐるか否かを以ては両助詞の差異を規定し得ないが、

㈣言語主体に最も近い関係を示す代名詞「ココ」「コナタ」等を承けない（註3）（逆に「アナタ」「カナタ」「カシコ」等を承けることは多い。eg大将こそ宮いたきてあなたへゐておはせ……源氏・横笛二八一6）

ことが分る。漠然とした所を示すことのみが「へ」助詞の特性であるならば、身近の場所を漠然と示す「コナタ」の例も存し得べきであらう。

㈡　「に」助詞の用法

懸りゆく動詞

「へ」助詞のやうに制約はなく、すべての場合に用ひられてゐ

る。即ち

㈠移動々作の行はれた結果ある場所に達する、の意を表す動詞「ツク」「イタル」に対するもの

返事は京にきつきてなんもてきたりける（伊勢二〇）

みかはのくにやつはしといふ所にいたりぬ（伊勢九）

いへにいたりてかとにいるに（土佐八八）

㈡移動しつゝ言語主体の方に進み近づく意を表す動詞「ク」に対するもの

いましはねといふところにきぬ（土佐二八）

この大徳の住む所に来て物語などしてうち休みたりけるに（大和一六八）

㈢移動しつゝ言語主体の現在地点から離れ遠ざかる意を表す動詞「ユク等」に対するもの

京に住くとて山吹につけて（大和五八）

あなたにわたらせ給はんもかたしけなし（源氏・御法一三八六10）

弁はあなたにまいりて（源氏・総角一六一〇11）

承ける語

これにも制約なく

㈣言語主体に最も近い関係を示す代名詞「ココ」「コナタ」を承けることも出来るし、

夕つけてこゝにまいり給へり（源氏・竹川一五〇〇11）

あか月にいて給とてもこゝなたにわたり給て（同・椎本一五五九5）

あさりもこゝにまいれり（同・総角一五八七6）

こゝなたにかようさうしのはしのかたに（同・椎本一五八〇1）

言語主体に最も遠い関係を示す「アナタ」「カナタ」「カシコ」をも承け得る。

あなたにわたり給てたいめんし給ふ（源氏・宿木一七六八6）

あなたにもえわたり給はねは（同・御法一三八八10）

あなたにかよふへかめるすひかひのと（同・橋姫一五二13）

よゐのまきれにかしこにまいりぬ（同・柏木一二二九10）

㈢「へ」助詞の特性

以上の如く「に」助詞の用法には限定がなく、移動々作の目標を示す場合には広く自由に用ひられてゐること、及び格助詞「に」の用法は最初に挙げた如く極めて広く、移動々作の目標を示すのはそれらの中の一用法に過ぎないといふこと、から考へ、格を示すといふ論理的な働きをなす助詞としては本来「に」助詞が存し、それのみで充分だったのではなからうか、と思ふのである。

これに対して「へ」助詞は、同じく**「移動々作の目標を示すが」「に」助詞と相違する特性は「言語主体の現在地点から遠く離れてゐる地点へ向って進んでゆく、といふ意を担ふ」**点にある（註4）と考へる。そこで、この推測を以てすべての用例を一貫して説明し得るか否かを次に検討する。

(イ) 万葉集

「へ」助詞の用ひられた二十八例を見ると、すべて言語主体の遥か遠方にある地点を指して進みゆく場合である。

うち日さす宮弊能保留と垂乳為や母が手離れ……何時しかも京都を見むと思ひつゝ……（五、八八六）

これは肥後国人大伴君熊凝が京都に上りゆく途中、疾を得て安芸

国佐伯郡高庭の駅家でこの世を去る時の歌六首中の一である。故に宮（京の意）は言語主体たる熊凝の現在地点安芸国から遠く離れた地である。

わが背子を夜麻登敝夜利氏松し立す足柄山の杉の木の間か（十四、三三六三）

右は相模国歌であるから大和は言語主体の居る相模から遙かに隔った地である。

含めりし花の初めに来し吾や散りなむ後に美夜古敝由可無（廿、四四三五）

詞書に「三月三日検校防人勅使并兵部使人等同集飲宴作哥」とあり難波に於て宴を開いたものと見られてゐる。

大君の命かしこみ於保の浦を背向に見つつ美夜古敝能保流（廿、四四七二）

これは出雲の於保の浦に於ける作。目指す都は未だ遙かに遠い。

いざ子どもはやく日本辺大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ（一、六三）

詞書に依れば憶良在唐の作、唐にあって遙か遠くの故国へ早く帰らう、といふのである。懸りゆく動詞は省略されてゐるが、〃かへる〃又は〃ゆく〃等、移動する動作なるべきことは明かである。

新羅奇敝可伊敝爾可かへる壱岐の島行かむたどきも思ひかねつも（十五、三六九六）

これは遣新羅使として出発した雪連宅満が、目的地にも着かず、壱岐の島で疫病にたふれたのを悼んだ作であり、壱岐の島で死んだ宅満と共にあるが如き心持で歌ったものであるから、言語主体は壱岐の島に居を占めてゐると考へられる。とすると、新羅も家も其処から遙か遠くにある。而もどちらかと言へば新羅の方が近いにも拘らず新羅に「へ」を用ひ、家に「に」を用ひてゐる。これは一見矛盾してゐるやうであるが、これこそ両助詞の特質を明かに示してゐるのではないかと思ふ。即ち言語主体が目標を遠いと感ずるか否かは実際の距離が問題なのではなく、全く心理的なものなのである。従って新羅と並べて考へた時、我が家は如何に遠くにあっても心理的には近く感じられ、まだ見ぬ異国は極めて遠く感じられるであらう。この故に一首の中で両助詞を使ひ分けたのであらう。

(ロ) 竹取・伊勢・土佐・大和

平安時代初期に位する竹取物語・伊勢物語・土佐日記・大和物語に於ても同様のことが言ひ得る。

物語の地の文に於ける言語主体とは、書く行為の主体、即ち物語の作者である。作者は作中人物を自由に移動させる。がその人物の移動に伴って物語の中心場面をも移動させるとは限らない。移動する人物を追って中心場面の移る場合もあり、場面は変らないこともある。何れの場合にも作者即ち言語主体はその物語の中心場面に居を占める。従って上述の〃言語主体の現在地点から遠く離れてゐる地点へ向って進んでゆく〃といふことは地の文に於ては〃物語の中心場面から遠く離れてゐる地点へ向って進んでゆく〃と換言することが出来る。

たつのくひのたまとりえすはかへりくなとのたまへはいつもくもあしのむきたらむかたへいなす（竹取・十二ウ）

この場合、中心場面は大納言大伴御行が家にありとある人を召し集めて物宣ふ所。そこを離れて足の向いた方への移動である。

せんさいの中にかくれゐてかうちへいぬるかほにてみれはこの女いとようけさうしてうちなかめて（伊勢二三）

右の例では、男が河内へ行くふりをして実際には行かず、女の様子を覗いてゐるのであるから中心場面は勿論女の所である。従って河内へ向ふ動作は中心場面から遠ざかるもの、即ち言語主体から遠く離れた地点へ向ふもの、である。

かくあるうちに京にてむまれたりしをんなこくにゝてにはかにうせにしかはこのころのいてたちいそきをみれとなにことともいはす京へかへるにをんなこのなきのみやかなしひこふる（土佐七）

少し前に「大津より浦戸をさしてこき出つ」とあるからその辺での作である。さすれば京は遥か遠方の地である。

世の中を倦んじて筑紫へ下りける人女の許におこせたりける（大和五九）

これも言語主体が女の所にある為、「下る」動作は「筑紫へ」であり「おこす」動作は「女の許に」なのである。同じく歌をおこす場合でも、動作主体の方に中心が置かれてゐる時は

さて思ひける友だちの許へ詠みておこせたりけり（大和五四）

なのである。

(ハ) 源氏物語

「へ」助詞八十八例中、先の推測にあてはまらぬものが四例存する（註2・3参照）。しかし後に述べる如く、次の院政期以後、次第にそのやうな例が多くなり、「へ」助詞の性格が変ってゆくのであるから、これらはその萌芽と見られる。故にこの四例に依って以上の推測が覆るものではなく、やはり同様に考へてよいと思ふ。

このゐたるおとな「……いつかたへかまかりぬるいとおかしうやう〳〵なりつるものを……」とてたちゆく（若紫一五六13）

右の例では言語主体たる〃このゐたる大人〃の現在地点から雀がいづかたへか移動したのであり、

君は二三日うちへもまゐり給はてこの人をなつけかたらひきこへ給（若紫一九三3）

に於ては、源氏の君が紫の上をなつけようと相手をしてゐる二条院西の対が中心場面であり、そこから内裏への移動である。

またの日は京へかへらせ給ふへければすこしおほとのこもりすくして……（松風五九二5）

これも中心場面たる明石上の大堰邸より京へ帰るのである。

なをかたはらいたけれとかくれのかたよりしん殿へわたり給御うしろてをみをくるに……（宿木一七二18）

これは六の君方から催促されて出掛ける匂宮が、中君の手前さすがに気が咎めてきまり悪いので、中君の所から直ぐには行かず一応寝殿へ行く、その匂宮の後姿を中君が悲しく見送ってゐる。言語主体はこの中君と共にある。故に、こゝに「へ」助詞を用ひたといふことは、中君の淋しい心理状態を如実に表すのに大なる効果を挙げてゐるやうに思ふ。

こまやかにふるとしの御ものかたりなとなつかしうきこえたまひてにしのたいへわたり給（初音七六7）

元日に源氏の君が御方々「婦人達」を次々と訪ひ歩き、花散里方から玉かつらの居所へと移る際の描写である。何気なく読み過す時は「へ」助詞でなければならぬ理由も感じられないのであるが、今迄述べて来たやうな特質が「へ」助詞にあるといふ事が認

められるならば、この部分は「へ」助詞を用ひた事に依って素晴しい心理描写がなされてゐると思ふのである。源氏の君は花散里となつかしく物語などをして、さて玉かつらのゐる西の対へ行くのであり、すぐ次には玉かつら方での描写となるのであるが、この場合言語主体たる紫式部は、花散里方での描写を終へて直ちに場面を玉かつらの方に切替へるといふやうな事はせず、しばらく花散里と共に居残って余韻を残してゐる。そして宿木の例のやうに事細く「御うしろでを見送る」などといふやうな説明を施さずとも、「へ」助詞を用ひることのみに依って源氏の君の後姿を見送ってゐる花散里の様子、心理を髣髴させてゐるのである。この少し前には次の如き文がある。

なにごとにつけてもすゑとをき御契をあらまほしくきこへかはし給今日はねのひなりけりにちとせの春をかけていはゝんにことはりなる日なり、ひめきみの御かたにわたり給へれはわらはしもつかへなとおまへの山のこまつひきあそふ（初音七六四13）

これも先の例と同様、源氏の君が紫の上の所から姫君の御方へ移るところであるが、紫の上方に於ける描写の後に、「今日はねのひなけり云々」と説明を附してゐるので、先の例の如く更に余韻を残す必要はない。故に場面を切替へ、「ひめきみの御かたにわたり給へれは」といふのを導入部として姫君方の叙述に移ったわけである。

三　院政時代以後

石垣謙二氏は前記論文に於て、助詞「へ」の変遷発展は具体的な接着性の捨象、概念的な方向性の抽象といふ事であり、大体鎌倉時代に発して室町時代に完成し現在に至ってゐる（助詞の歴史的研究七九―八〇頁）とされる。「へ」助詞変遷の跡を精密に辿ったこの結論は確かに認められるのであるが、これがすべてであるとは云へぬやうに思ふ。奈良時代平安時代に於ける「へ」助詞の特性を、石垣氏の云はれる「具体的な経由性」、換言すれば、移動性動作の目標を示すもの、と限定するのみでは満足せず、「に」助詞との比較に於て「言語主体の現在地点から遠く離れた地点を指して進みゆく場合の目標を示すもの」とした私の立場から眺める時、具体的経由性から概念的方向性へ、の発展以上の発展が認められるやうに思ふのである。

(イ)　今昔物語集

先づ院政期の今昔物語集では、前代まで「へ」助詞の用ひられなかった、言語主体の方に進み近づく意を表す動詞「来」「来タル」にかゝる例、が僅かながら現れる。従って承ける語の面に於ても、言語主体に最も近い関係を示す代名詞「コヽ」「コナタ」等が現れるのである。

父母ノ云ク。仏ノ御弟子ニ成ト云トモ。一年ニ三度必ズ我許へ来レ。（巻一、四二10）

局へモ不寄来ズシテ過テ行ケレバ。（巻廿三、六二〇9）

此へ来レ見ムト云ケレバ。（巻廿六、七九二3）

実ニハ汝ヲ敦サムガ為ニ此へハ将来ツル也。（巻卅一、一〇五八9）

これが宇治拾遺物語に至ると「来」「来タル」のみでなく、言語主体に進み近づく意の「参ル」も見出され、

まことにやり戸たつるをとしてこなたへくらんとまつほと

に。をともせでおくざまへ入ぬ。（巻三、七一16）

これへ来たる人にはまづ物いはぬ薬をくはせて。次にこゆる薬をくはす。（巻十三、二四七8）

こなたへまいれといへば。庭中にまいりてゐたるに（巻九、一七〇1）

さぶらひいできてこなたへまいり給へといへば（巻十四、二六四10）

更に時代が下ると、この種の動詞に対して「に」助詞よりも優勢に用ひられるやうになる。グラフ参照。

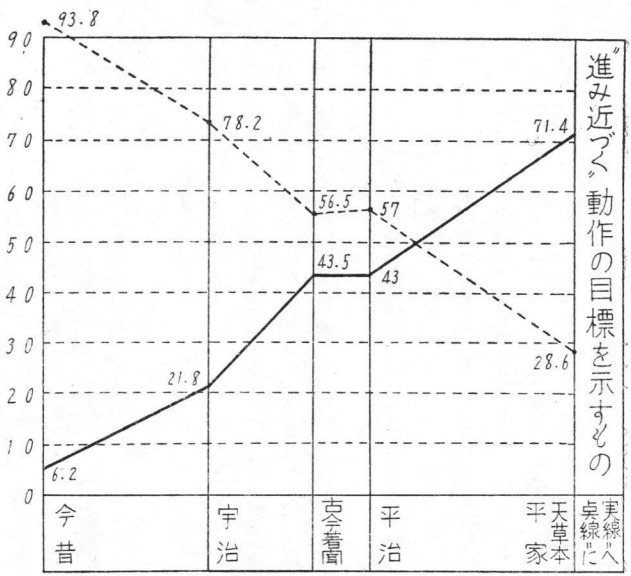
この現象は「へ」助詞が移動性動作の目標を示す場合、言語主体の現在地点から遠く離れた地点へ向って進んでゆく意を担ってゐる、といふ意識の次第に薄れてゆく事を示してゐる。つまり前代までの「へ」助詞の特性が失はれてゆくわけであるが、一面から考へればそれは用法の拡大発展に他ならないのである。

(ロ) 宇治拾遺物語

言語主体の方に進み近づく意を表す動詞に対しての用法が今昔物語集に発し、宇治拾遺物語に至って益々盛に用ひられる状態を見たのであるが、宇治拾遺物語には更に次の如き用法も現れてゐる。即ち、移動する動作そのものでなくとも、移動々作の行はれた結果ある地点に達する、の意を表す動詞「ツク」に対しての用法である。（註5）

山城国たはらといふところへ。道もしり給はねば五六日にぞたどる〳〵おはし着にける。（巻十五、二七四8）

こゝにやどりたる人のわかさへとていぬるが。あすこゝへ帰つかんずれば（巻九、一六二3）



○各文献間の年数に応じて間隔を考慮した。

○古今著聞集の成立は建長六年（一二五四）であるが、平治物語の成立年代が明かでない為、両者の先後は明かでないが、助詞の歴史的研究がなされゝば、この方面から或はその先後が推定出来るか、とも考へるので、今は仮にこの位置に定めた。

ところがこの期には、右の例に明かなやうに「へ」助詞が用ひられるのは「ツク」が移動を表す動詞「オハス」「帰ル」などと複合してゐる場合に限られて居り、「ツク」が単独ならば

家につきてみれば。しろくたかきつゐぢをとをくつきまはして。門いかめしくたてたり。(巻六、一一九8)

の如く「に」助詞が用ひられる。それが後の文献になると「ツク」が単独に現れても

ことゆへなく彼ぎしへつけてけり。(古今著聞集巻二、五二14)

鎧の袖にさして六波羅へぞつきにける(平治物語四三オ)

十月の十三日には平家は駿河国の清見が関へつかれてござった。(Qiyomiga xeqi ye tçucarete 天草本平家一四八頁)(註6)

和泉へついて(Izzumiye tçuite 同二一八頁)(註7)

の如く「へ」助詞も用ひられるやうになるから、この傾向も時代と共に著しくなってゐると考へられる。

(ハ) 古今著聞集

更にこの傾向が進むと、移動性を有たない動作に対しての目標をも示すに至る。これが石垣氏の云はれる〃方向性への発展〃に相当する。

わが心ひとつにてはかなはじこのよしを院へ申てこそはと云ければ(宇治拾遺巻十二、二三〇9)

この顕光公は死後怨霊と成て。御堂殿辺へはたゝりをなされけり(同巻十四、二六七14)

となりにかんかこうといふ人ありけり。それがもとへけふくふべき料の菜をこふ。(同巻十五、二八七7)

に於ける「申す」「たゝりをなす」「こふ」等に対して用ひられた宇治拾遺の三例を魁として、古今著聞集以後は非常に多く用ひられるに至る。

光親卿を御つかひにて内裏へ申されたりければ(古今著聞集巻三六五16)

為家卿のもとへ御尋有けるに(同巻八、一八二15)

蒔絵師がもとへかさねて……と仰られければ(同巻十六、三一二15)

いかにも御酒まいらぬ由をおくのかたへいひければ。(同巻十七、三五四3)

天草本平家に至っては、以上の「申す」「仰す」「云ふ」等に限らず

殿上人が……忠盛のことを帝王へ訴へられまらした(teivô ye vttayerare maraxita:八頁)

重盛の次男関白殿へ狼藉をなされたこと(Quanbacudono ye rôqi uo nasareta coto 一三頁)

重盛はこの事について清盛へ意見をば召されなんだか(Qiyomoriye yçen uoba mesarenandaca 三〇頁)

清盛の法皇へ対し奉っての憤り(fôvôye taixi tatematçutte no igidoori 四一頁)

義経へこの由を告げたれば(Yoxitçuneye……tçugetareba 二二五頁)(註8)

山門も源氏へ一味せられいかし(Guenji ye ychimi xerare caxi 一七五頁)(註9)

の如く「訴ふ」「狼藉をなす」「意見を召す(意見をするの意)」「対す」「告ぐ」等種々の動詞に対しての目標を示してゐる。(註10)

(ニ) 天草本平家物語

以上「へ」助詞は次々と用法を拡げて来たのであるが〃動作の目標を示す〃といふ点で一貫してゐる。が遂にはこの一貫した流れから逸脱した用法が現れる。

おさなき者あひぐしてかた辺土へ忍びて侍つるに（忍ンデキタガ）（平治物語三ノ才）

この程は八島へござる（八島ニヰル）とこそ承つたになんとしてこれまでつたへてござつたぞ（Yaxima ye gozaruto coso 三〇九頁）（註11）

郎党がお庭へ伺候仕つたことも（voniua ye xicô tçucamatsuta 九頁）（註12）

この場合の「かた辺土」「八島」「お庭」は、「侍る」「ござる」「伺候仕る」等の動詞に対する目標とは考へ難く、それら動作の行はれる場所といふべきではないかと思ふ。従来の〃動作の目標を示す〃用法と、一見全く無関係なかゝる用法が如何にして可能となつたのであらうか。「ござる」はこの場合は「ヰル」の意に於て用ひられてゐるのであるが、移動を表す場合の方が多い

これはさていづくへござるぞ（izzucu ye gozaruzo 一八五頁）

といふことなども、かゝる用法の出現を容易ならしめた一因と考へられるが、又、かゝる用法の現れる以前に次の如き例が見られる。

滋野井の柳を一本他所へうつしうへたりけるにも。この定にのこりの木ゆへなくかれたりけるとぞ。（古今著聞集巻十九、三八七15）

松の池へおひかゝりたるが有けるもとに居て待所に。（同巻十七、三五一15）

右の「うつし植う」の中「植う」といふ動詞に対して必要なのは目標ではなく、何処に植ゑるかの場所なのである。「へ」助詞は本来場所を示す用法をもたないのであるから、この場合当然「他所に植う」と「に」助詞を採るべきである。が、この「植う」の上に「移す」といふ動詞が複合してゐる。「移す」は移動性を伴ふ動詞であるから、その目標を示すのに「へ」助詞を用ひる事は可能である。この場合「へ」助詞が採られてゐるのは、この「移す」といふ動詞にひかれたものと考へられる。次の例に於ても「生ふ」といふ動詞は場所を要求し、従って「に」助詞を採るべき語であるが、下に目標を必要とし、而もこの場合意味上の中心をなす「かゝる」といふ動詞あるが故に「へ」助詞が用ひられてゐるのである。

もし命をたすからんと思はば、山林へぞ逃げこもり候はむずらん（平治一六）

も同様に考へられるであらう。

このやうに「へ」助詞のかゝりゆく動詞の一部に、たとへそれが意味的中心をなしてゐないとは言っても「植う」「生ふ」「籠る」等、その動作の行はれる場所を必要とする語が入って来たといふ事は、次の段階に於て、これらの語が単独に用ひられても「へ」助詞を採るに至る可能性の芽生えに他ならないのであって、かくして先に挙げた平治物語や天草本平家の如き例が現れたのである。

四 結び

以上をまとめると、「へ」助詞は

平安時代中期以前に於ては〝移動性動作の目標を示し、言語主体の現在地点から遠く離れた地点へ向ってゆく、の意を担ってゐる〟。所がこの特性がその後次第に失はれてゆき、その反面用法が拡大する。

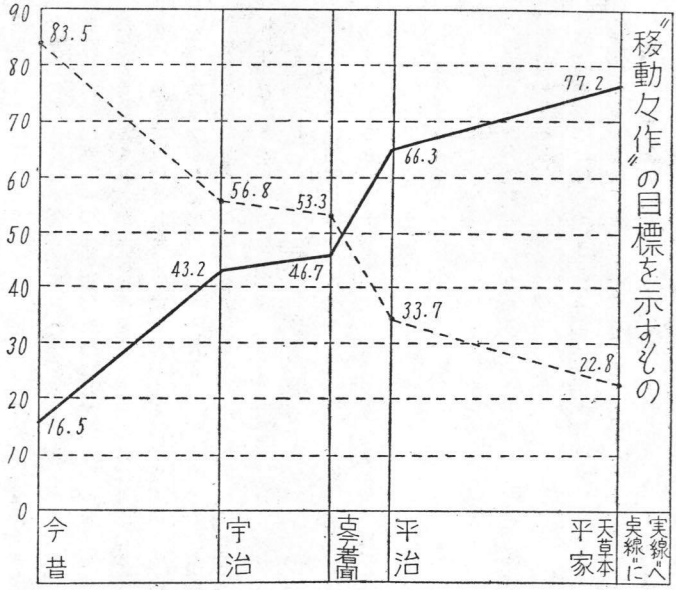
院政期の今昔物語集に於ては、進み近づく場合をも含めて〝すべての移動性動作の目標〟を示すことが可能となり

鎌倉初期の宇治拾遺物語では、移動々作そのものではなく、それを前提とした〝到着点〟を示す用法が現れる。

鎌倉時代中期には今古著聞集の例が示すやうに〝移動性を全くもたぬ動作に対しての目標〟をも示すに至る。

室町時代　以上次々と用法が発展拡大して来たが、すべて動作の目標を示す　といふ点に於て一貫してゐるのであるが、この期の天草本平家物語に至ると（平治物語にもその先駆が見えてゐる）その一貫した中心的な用法から外れたものが現れる。それは〝動作の行はれる場所〟を示す用法である。

かくの如く「に」助詞はその用法に於て発展拡大しては来たが、やはり「へ」助詞用法の中心をなす、最も重要な用法は〝移動性動作の目標を示す〟ものであり、移動性を有たぬ動作の目標や、動作の行はれる場所を示す用法は、いはば例外的な存在なのである。何となれば、移動性動作の目標を示す用法は、時代と共に量的に増加し、下のグラフに示されるやうに遂には「に」助詞をも凌駕するに至るのであるが、移動性を有たぬ動作の目標を示すものや、動作の行はれる場所を示す用法は極めて微々たる存在でしかないからである。即ち天草本平家に於て、移動性を有たぬ動作の目標を示すものは、「へ」助詞全用例数の七・九%、動作の行はれる場所を示すものは〇・六%である。



資料

万葉集……万葉集総索引

竹取物語……新井信之氏「竹取物語の研究」中の古本
伊勢物語……池田亀鑑先生「伊勢物語につきての研究」校本篇
土佐日記……静谿書屋本
大和物語……為家自筆本
源氏物語……池田亀鑑先生「校異源氏物語」
今昔物語集……新訂増補国史大系
宇治拾遺物語……同右
古今著聞集……同右
平治物語……東京教育大学蔵平仮名古活字渡辺文庫本
天草本平家物語……（漢字仮名は亀井高孝飜字本による）

「へ」助詞は「アタリ」を意味する名詞「へ」から出たものであらうと云はれる。（三矢重松氏「高等日本文法」・杉井鈴子氏「助詞「へ」の成立」国語学第十九輯）石垣氏も上代特殊仮名遣に於て両者共に甲類である事を指摘して居られるし日本語に於て本来具体的な名詞であったものが次第に抽象的な観念を表す助詞として働くやうになるのは通例であるからこの推測は妥当であらうと思ふが、奈良時代に於ても「へ」はすべて名詞であって未だ助詞としての機能を発揮してゐないとする杉井鈴子氏説には私としては今の所賛成し難い。

「へ」助詞は訓点資料に殆ど現はれない。即ち今の所、天永四年点神田本白氏文集巻三新豊折臂翁に一例（杉井氏報告）、変体漢文はあるが楊守敬旧蔵本将門記に「渡（ワタル）於上総国」（一〇頁一行中田先生御教示。）このすぐ後六行目に於ては全く同じ「渡於上総国」に対して、先に「へ」を送り、それを消すやうに重ねて「に」を記してゐる。）の一例が見出されたのみである。勿論訓点語に於てはその資料の性質上、ある語の出現可能性が極度に低いといふ事があり得るが、旅行記であり移動に関する語の出現が当然予想される石山寺蔵大唐西域記（長寛元年点）にも遂に見出されなかった。この事実は如何に解釈すべきであらうか。杉井氏は、奈良時代に助詞「へ」がその機能を確立してゐなかった事を証拠だてるものとされるが速には断じ難い。一つには外国語の飜訳といふ極めて制約された場面に於てかゝる微妙な感情の表出が必要であるか否かは識別し難かったのではなからうか。又識別する必要もなかったのではなからうか。いづれにしても推測の域は出ない。

註1　「へ」助詞を用ひ得る動詞も、「ツク」「イタル」や「キル」が複合すると「へ」助詞は用ひられなくなる。例へば「オハス」「カヘル」といふ動詞に対しては
二条院へおはしぬ（源氏・花宴）
又かさねて京へ帰り給ふへき宣旨くたる（同・明石）
の如く「へ」助詞も用ひられるが「オハシツク」「カヘリキル」となると
今や京におはしつくらむ（源氏・澪標）
佐太の岡辺爾反居（へゐり）ば……（万葉二、一八七）
と「に」でなければならなくなる。

註2　源氏物語に「へ」助詞が「ク（来）」に対して用ひられた場合が二例ある。
そなたへまいりくへけれとうときすへうもあらてなむ（夕霧

一三二六14)

これは落葉の母御息所が娘に対して用ひた言葉でなるが「そなた（落葉の居る方）へ行くべきであるが動けない（から此方へ来てほしい）」の意である。「来る」といふ動作は現代では普通、言語主体に近付く動作のみを示すものと考へられてゐる（全国方言辞典に依れば長野県上水門郡・岐阜・富山・石川県鳳至郡伯耆・出雲・長崎・熊本・宮崎に於ては「行く」の意にも用ひるやうである）が古くは言語主体から遠ざかりゆく意に用ひられる事も珍しくない。大日本国語辞典にも「彼方へ行くの意」として

大和には鳴きてか来らむ呼児鳥象の中山呼びぞ越ゆなる（万葉一、七〇）

帰り来て見むと思ひしわが宿の秋萩薄散りにけむかも（同十五、三六八一）

限りなき思ひのまゝに夜も来む夢路をさへに人は咎めじ（古今、恋三）

の三例を挙げてゐるし源氏にも他数例見出される。従ってこの例は「ク」といふ形をとってはいるが言語主体の方に進み近づく意を表す動詞に対して用ひられたものではない。

女房「……」とさかしかりてとさまへくいとにくゝ（空蟬九二11)「とざま」とは「外の方」の意であって全体を「外の方へ行く」の意に解したい所であり、別本系の麦生本・桃園文庫蔵阿里莫本には「とさまへゆく」「とさまにゆく」の異文さへ存するが、この前後は源氏の君と小君を中心にして描かれてゐるのであるから、この場合の「とさま」は即ち「こなた」なのである。（河内本では「こなたにく」となってゐる）とすると、言語主体の方に進み近づく動作に対して「へ」助詞の用ひられた唯一つの例となる。

註3 小君「あらすこゝもとへいつるそ」（空蟬九二12）

夕霧「これかれはへりつこなたへまかてんや（若菜上一一一14）

右の例は「コヽ」「コナタ」を承けている。が二例とも「イヅ」といふ動詞に懸ってゐる。「出ヅ」とは、動作主体と言語主体とが一致している場合には、今居る所から他へ向って動く動作であるから、言語主体から離れてゐる場所を意味する語と結びつくのが最も自然である。にも拘らず「コヽ」「コナタ」と結びついてゐる点少しく変な例ではあるが、例外的存在である。但し河内本及び別本系の飯島氏蔵陽明家本に於ては「に」である。

こなたへもてわたりてみせたてまつり給へはおもてうちあかみて……（夢の浮橋二〇六四2）

別本の高松宮家本・保坂本・国冬本・桃園文庫本に於ては「に」となってゐるが異例である。

註4 これは「へ」助詞が非論理的だといふ事ではない。論理的な「格」を表すのみでなく、それに加へて〝遠くへ〟という心理的な表現価値を有する、といふ事である。

註5 今昔物語にも既に先駆として

猿其レハ糸安キ事也。有ツル所ヘダニ行着ナバ事ニモ非ヌ事也ト云ヘバ。（巻四、二七〇3）

が一例見出される。

註6・7　この三文に対応する平家物語の本文を見ると夫々次の如く「に」助詞が用ひられてゐる。

十月十六日には駿河国清見関にぞ著給ふ（巻五、富士川）

和泉の国吹飯の浦にぞ着にける。（巻八、室山合戦）

典拠たる平家物語に「に」助詞が用ひてあるに拘らず天草本平家に於て「へ」助詞が用ひられてゐるのは、これが明かに天草本成立時代の用法の反映である事を物語ってゐる。

註8　以上の五例は之に対応する本文を平家物語に見出す事が出来ず、天草本に於て新に附加されたものと思はれるから、かゝる「へ」助詞の用法は室町時代のものと考へられる。

註9　この部分は平家物語に於て次の如くである。

源氏に同心して兇徒を誅し（巻七、木曾到山門牒状同返牒）

故にこの例も天草本成立当時の語法と考へてよいであらう。

註10　この他「奉る」「参らす」「進ず」「賜ふ」「寄進す」等

女房のもとへ。……枕を奉るとて（古今著聞巻五、一一〇7）

この珠淮后へ参らせて給はるべし。（同巻二、五〇16）

年中行事を絵にかゝれて。……松殿へ進ぜられたりけり（同巻十一、二二八8）

少将を急いでこれへ賜はれ。（coreye tamauare 天草本平家五六頁）

蟬折をば金堂の彌勒へ……寄進させられて（Mirocu ye qixin saxerare 同一二四頁）

もある。これらはそれ自体移動を表すものではないが、その動作の結果として物の移動が考へられる故か、「申す」「たゝりをなす」等より少しく発生が早く今昔物語の二例をはじめとする。

文殊ヲ使トシテ摩耶夫人ノ御許へ奉リ給テ宣ハク。（巻二、六二3）

明ル日瓶ニ金ヲ入レテ此老婢ニ令レ持テ。謀チテ王宮へ奉ル。（巻三、一四五7）

註11　平家物語にはこれに対応すべき本文がない。

註12　平家物語では「に」助詞が用ひられてゐる。

郎従小庭に祇候の条（殿上闇討）

記　本稿をまとめるに当り大野晋氏より多大の御教示を賜はりました。又訓点語に関しては中田祝夫先生、築島裕氏にお教へ頂きました。厚く御礼申上げます。

本稿は昭和二十三年六月東大国語研究室土佐日記輪読会に於て報告したのに端を発し、国文第二号（お茶の水女子大）に発表した前半、及び後半昭和三十年十一月廿日国語学会での発表、を補訂したものである。——昭和三十一年一月二十六日——

——東京大学大学院学生——